

子育て環境の変化と虐待傾向にある母親が望む子育てサービス

流通科学大学 加藤曜子
子ども家庭福祉研究部 才村 純
北九州市児童相談所 安部計彦
帝塚山大学 才村真理
東大阪市保育相談室 千葉郁子
枚方市保健センター 西岡美砂子
大阪府中央子ども家庭センター 吉岡芳一

要旨

目的は一歳半を養育する母親の育児状況を把握することと虐待防止のサービスを明らかにすることにある。調査期間は、2000年9月～10月にかけて行った。枚方市、高槻市、守口市の協力を得た。質問紙は一歳半健診の前に送付し、691の回答を得た。結果は、1) 虐待傾向にある親自身は、具体的サービス例えば保育、家事サービス、一時保護、カウンセリングサービスを求めていることがわかった。2) 孤立しがちな母親は、育児情報のみを必要とした。今後は虐待予防には、孤立しがちな親を含め、親に有効な総合的なサービスが提供できるように工夫することが必要となる。

見出し語：児童虐待、虐待予防、子育て支援

Preventing Mothers from Possible Child Abuse — In case of 1 1/2-years-old infants —

Yoko KATO, Jun SAIMURA, Norihiko ABE, Mari SAIMURA, Ikuko CHIBA,
Misako NISHIOKA, Yoshikazu YOSHIOKA

Abstract

The purpose of this study was to examine the child-rearing conditions of mothers having one and a half year old infants and also to clarify the expected services for prevention of child abuse. The survey was conducted in September through October 2000, with a cooperation of Hirakata-city, Takatsuki-city and Moriguchi-city. Questionnaire sheets distributed were distributed to those mothers prior to their children 1 1/2-years-old health examination.

From the observations of 691 responses, the following two findings were made clear points.

- 1) To prevent child abuse, concrete measures such as day care, house-holding services, respite care and counselling are expected.
- 2) Mothers being isolated need to be given only child rearing information.

These are supposed to be effective in the prevention of child abuse.

key words

prevention of child abuse, child rearing anxiety, social services

I 研究目的

児童虐待防止法以後、あいついで子どもの死亡事例が報じられている。5才に満たない幼児の死亡率は高く、こういった現象に対し解決策が急がれている。福祉領域においては、働く親への支援とともに、子育て支援センターなど地域に根付いた母親へのサポートを提供し保育支援の充実を打ち出してきている。保健領域においては、母子保健の10年計画を打ち出し、その目標の一つに育児不安解消と、虐待防止を掲げた¹⁾。さらに福祉、保健、教育などが連携してこの問題に取り組む必要があることが強調されている。子育て環境が大幅に変わり、子育てがしにくくなっているという現状の中で、児童虐待防止のためには一体何が変化し、何が問われ、何が必要かを把握する必要がある。その手だてとして母親の意識調査から、育児不安につながる児童虐待との関係を把握しつつ、母親が求める予防を含めたサービス環境を明らかにすることにしたい。

II 研究方法

1. 母親を取り巻く育児環境調査構成

児童虐待関連として、育児不安等の先行調査が多くなされている。今回の研究は先行研究の一つである20年前に行われた大阪レポート調査と比較しつつ、母親のどういった環境の変化がみられたのかということと、現在の親の状況と親の虐待的な行為との関係を明確にし、さらに母親達が求めるサービス援助を把握することを調査の枠組みとした²⁾。

大阪レポートの結論では、育児不安要因は1)母親が子どもの欲求がわからないこと、2)母親の具体的心配事が多いこと、3)母親に出産以前の子どもの接触経験や育児経験が不足していること、4)夫の育児への参加、協力が得られないこと、5)近隣に

母親の話相手がいないことを挙げた。

さらに、体罰については、「体罰は、乳幼児虐待の社会的基盤ではないだろうか」と仮定し、体罰を用いる母親は、子どもと遊ばない、テレビを長時間みせている、育児不安が強く、精神的ストレスを募らせている」と言及した。

調査構成は、大阪レポートの質問に、虐待状況、必要と考えるサービスを加えた。保健所自体が実施した大阪レポートと異なり、子どもの状況について心配する親への質問に個別に答えられる体制にないため、子どもの状況は除いた。

大阪レポートの項目構成は以下の通りである。

親の基本的属性	年齢
	就労状況
	家族構成
母子を取り巻く環境	近隣とのつながり
	子どもとのかかわり
	具体的かかわり
	情緒的なかかわり
	夫の協力度
	育児の手伝い
	母自身の問題と母親の子へのかかわり
	親自身の育児の不安対応
子どもの状況	毎日の生活

今回の調査項目構成は以下の通りとなる。

親の基本的属性	年齢
	就労状況 経済状況
	家族構成
親の子育て状況	近隣とのつながり
	子どもとのかかわり
	具体的かかわり
	情緒的なかかわり
	夫の協力度
	育児の手伝い
親自身の感情	
虐待行為	
親からの被虐待歴	
夫からの暴力歴	
子育てに必要なサービス等	

また、虐待状況を表す虐待行為については先行調査の枠組みを用いて調査票に項目を追加した。

虐待行為について利用した項目

- a. 泣いて放っておくことがある
- b. 食事を与えないことがある
- c. 入浴をさせない
- d. 大声で叱る
- e. お尻を叩く
- f. 手を叩く
- g. 頭を叩く
- h. 顔を叩く
- i. つねる
- j. もので叩く
- k. ものを投げる
- l. 言葉で傷つける
- m. おいて出かける
- n. 閉じこめる
- o. 裸のままほおっておく

虐待行為の回答については先行研究を参考に、項目の回答には、「まったくない」「ときどきある」「しばしばある」とに分けた。また虐待傾向を算出する場合には、まったくない0点、ときどきある1点、しばしばある2点を加算する手続きをとった³⁾。可算することで虐待傾向が高い、低いを理解することにした。

1. 調査方法

大阪府下の3市に在住する一歳半を育てる母親へのアンケート調査を実施した。

大阪府市町村保健活動協議会の4地域ブロックのうち2つの地域ブロックから協力してくれる保健センターを調査地を選び、行政の同意を得た上で実施した。健診前の郵送時に回答用の封筒に入った質問紙を同封してもらった。健診当日回収箱に無記名で入れてもらった。枚方市への配布数802、回収は361で有効回答は360、高槻市は配布数290で、回収は219で有効回答は219、守口市は、配布数156で、回収は115で有効回答は112であった。総配布数1148のうち回答者は696、有効回答は691（有効回答率60.1%）であった。子育て中の親の

負担量を配慮し、調査票は一枚シートにとどめた。

調査期間は、平成13年9月から10月である。

Ⅲ 研究結果

1. 大阪レポートとの結果比較

大阪レポートは、一年間に健診した一歳半健診の親を対象にしている。本調査は、1ヶ月間の健診受診した親を対象にしている。また、大阪レポートは、大阪の南部の都市で実施されたが、今回は、中部、北部地域であり、都市の性格は異なる。そういった意味で比較に限界があった。

(1) 属性についての結果(表1)

a. 住居状況

住居状況をみると、集合住宅が49.2%から2000年の55.9%へと増加した。

b. 母親の就労状況

1981年調査と2000年調査をみるとほぼ変化はない。

c. 親の年齢構成

1981年調査では25～29才が全体の54%を占め最多であったが、2000年調査では30～34才が全体の43.6%であり、女性の出産年齢が高くなる傾向が示される。

(2) 育児と親の状況の結果(表2)

a. 育児について

育児状況の変化をみていくと、「乳幼児の世話を体験したことがあるか」については、2000年調査では、「経験がなかった」が64.4%を占め、1981年の39.3%に比べ、25.1ポイント増加した。「育児にいらいらすることが多いですか」の質問も「はい」の回答は1981年に比べ、約3倍となった⁴⁾。子どもへの関心度が高まり、子どもへの関わりを示す「ある時は見逃しある時は叱りますか」や「子どもにあればしてはいけないとよく禁止しますか」も「はい」がそれぞれ、10.4ポイント、23.6ポイント増加した。「テレビやビデオをみせる」も増加した。「子どもの性格を受け入れていますか」

は、「はい」が20ポイント低下した。かつて体罰との関係が深いと大阪レポートで報告されている要因は、増加傾向にあることがわかった。

b. 家庭の孤立状況について

「育児を手伝ってくれる人がいるかどうか」については、「いる」の回答が1981年では63.9%から89%に増加した。「手伝ってくれる人」については、母方祖父母が1981年22.2%から2000年調査では54.6%へ、また夫も31.7%から64.5%と大幅に増加した。近隣とのかかわりをみると、「世間話や子どもの話しをする人がいるかどうか」の項目については、「いない」が10%から13%に増加した。今回新たに加えた「他のお母さんの中にはいってしゃべるのは得意か苦手か」の項目を作成したが「苦手」と答えた者が22.6%、さらに、「他の人がお母さんの育児を批判したり、ほめたりするのが気になるかどうか」との関係を見ると、「気になる」と答えた人が28%を示した。世間話をする人が「いない」は他のお母さんの中に入ってしゃべるのが「苦手」と影響しあっていることがわかった。また世間話をする人が「いない」と、「他人が育児を批判したりほめたりするのが気になる」場合が多かった ($p < .0000$)。「他のおかあさんの中に入ることが苦手」な人は、育児の評価が気になる関係にあった ($p < .05$)。「いらいら」は、人との付き合いの「苦手な」人に多い ($p < .01$)。「苦手」な人は「晴れていても子どもを部屋で遊ばせている」 ($p < .0001$)と、「テレビやビデオをみせている」場合が多く ($p < .05$)、また「育児にいらいらしている」が多かった ($p < .01$)。また「子どもにテレビやビデオをみせる」や「禁止的なかわり」は、「晴れていても家で遊ばせる人に多かった (いずれも $p < .01$)。話す人がいないということよりは、むしろ話すのが苦手なことや、評価されるのが気になる人に多く、またそのために晴れていても外出せず家で遊ばせたり、ビデオをみせるなど、人とかわらない、みずから引きこもりがちなが見いだせた。

2. 虐待傾向との関係について

虐待傾向を示す項目は表3の通りで、「しばしば」がもっとも多いのは「大声で叱る」と「お尻を叩く」であった。

表3 虐待傾向を示す項目

	まったくない	ときどき	しばしば	不明
泣いても放っておくことがある	138	493	50	10
食事を与えないことがある	672	16	1	2
入浴をさせない	640	47	2	2
大声で叱る	69	459	162	1
叩くお尻	209	390	81	11
叩く手	151	450	74	16
叩く頭	343	259	62	27
叩く顔	452	177	36	26
つねる	565	112	13	1
もので叩く	630	53	5	3
ものを投げる	596	75	14	6
言葉で傷つける	413	232	39	7
おいて出かける	561	113	12	5
閉じこめる	591	80	12	8
裸のまま	687	3	0	1
自動車に残す	623	57	8	3

虐待傾向をあらわす項目回答から、どういった因子で構成されているのかを明らかにするために、主成分分析を行った。そこで、4つの因子が抽出された(表4)。

第一因子を構成するものとしては、「大声で叫ぶ」「子どもを叩く(手、尻、顔、頭)」で、虐待タイプAとした。

第二因子を構成するものは、「もので叩く」「ものを投げつける」「つねる」「子どもが傷つくことをいう」「閉じこめたり追い出したりする」であった。これを虐待タイプBとした。

第三因子を構成するものは、「子どもを車に残す」「子どもをおいて外にでる」を無自覚型とした。

第四因子を構成するものは、「食事を与えない」「風呂に入れないうちがある」などをネグレクト型とした。

4タイプごとに、方法で説明したように該当する項目を加算して合計値を算出し、先行研究によって影響を与えると考えられる項目を投入し、重回帰分析を行った(表5、表6)。

虐待タイプAの得点が高い場合は、「い

らいらする」「よく禁止する」「子どもの数が2人以上」「母親の年齢が低い」「経済苦と感じる」「自分の親から暴力を振るわれる」「育児を手伝う人がいない」とのつながりが強かった。

虐待タイプBの得点が高い場合は、「子どもの数が2人以上」「いらいらする」「自分の親に暴力をふるわれたことがある」「よく禁止する」「子どものかかわりへの迷い」「父親が遊ばない」であり、中でも「子どもの数が2人以上」がもっとも強く影響していた。

無自覚型とネグレクトについては、項目について特に影響を及ぼすと出たのは、子どもの数と経済状況であったが、実数が少ないため分析は困難となった。

虐待タイプA傾向の強い者と虐待タイプB傾向の強い者の違いは、叩く母親側に痛みを伴うかどうかを考えられる。虐待タイプBを示す場合は、タイプAに比べると経済状況や母親の年齢に関係なく、子どもの数が多く、子どもの関わりの迷い

夫が子どもと遊ばないがある。従って今回、身体的な傾向を示す親について主に検討することとなった。

3. 母親が必要だと捉えている子育ての環境や子育て支援サービス

必要なサービスの領域を環境的なもの、教育的なもの、相談的なもの、具合的サービス提供として設定したうえで、各項目の関係を分析した⁵⁾。

全体的な傾向として頻度の高いものを検討すると、安全に遊べる所と、必要な時に預かってくれる所、文化施設やサークル、自由に話せる所などが選択されており、母親が話せる仲間を求めていることがわかった。

虐待傾向と関連が強かった項目と関連のある必要な子育て支援サービスについて、不明、無回答を除きカイ二乗検定を行い、有意な差が認められたものにアスタリスク(*)をつけ表にした(表7、8)。

表7 必要な子育て支援と虐待傾向に関連のある項目 (有意差が認められたもの)

	虐待傾向に影響する項目	回答数	イライラ	経済	人数	母年	育児	被虐	禁止	夫が	子が	子育て	一定
			多い	あり		若	手	待	する	と	の	し	
環境	安全に遊べる所	513											
	文化施設	331										*	
	育児サークル	232			*							*	
	自由に話せる所	224										*	
	中高生の保育経験	86											
保育	必要な時に預かる	426	*				*					**	
	保育所	229		*		*		*					*
家事	定期的な一時保育	139	***							*		*	
	福祉施設の一時的預かり	87	*					*					
	家事サービス	60								**		*	**
相談	悩みの相談	206	*									*	
	育児相談に乗ってくれる	199										*	
	生活助言	45	*	**			*						*
	グループ	69						*	*			*	
	電話相談	67											
教育情報	育児情報を教えてくれる	210					*						
	遊び方を教えてくれる	127	*		*							***	
	発達の知識	114			*								
	子育て講座	68										*	
	その他・自由記述	32											

(*p<.05, **p<.01, ***p<.001)

表8 必要な子育て支援とひきこもりがちな親・その他項目の関係

	人付き 合い苦 手	評価気 にする	要求が わから ない	晴れて も家で 遊び	話す人 なし	息抜 きな し	離れ たい	単婚
環境	安全に遊べる所							
	文化施設			*		*	*	
	育児サークル							
	自由に話せる所 中高生の保育経験							
保育	必要な時に預かる 保育所							**
	定期的な一時保育							
	福祉施設の一時預かり		*				*	
	家事サービス			*		*		
相談	悩みの相談		*					
	育児相談に乗ってくれる		**			*	*	
	生活助言 グループ		**					
	電話相談							
教育情報	育児情報を教えてくれる	*	*	*	**			
	遊び方を教えてくれる						*	
	発達の知識		*			*		
	子育て講座 その他・自由記述			*				

(*p<.05, **p<.01, ***p<.001)

虐待傾向との関わりが強いものについては、具体的サービスの提供（必要な時に預かってくれる一時保育）や具体的相談、教育・助言（育児相談に乗ってくれる、遊び方を教えてくれる、生活助言）を求める傾向がみられた。

また、孤立的な場合を表す「話す人がいない」「人との付き合いが苦手」も、虐待傾向との有意差は認められなかったが虐待傾向に影響する項目と関連しあっていた。そこで母親が求めるサービス内容をみると、「話す人がいない」「人と付き合い苦手」はグループ参加を望まず、むしろ、受け身である育児情報を求める傾向が強かった。「他人からの育児の評価が気になる」者は、母親の悩みの相談や育児相談に乗ってくれる、育児情報もほしい、生活助言もほしいなど、個別の相談にのってもらいたいとの希望は強かった。

また、近年グループワークが着目されてきているが、影響しあった項目をみると、「子の要求がわからない」「子どもの性格が受け入れにくい」「子育てに迷う」「なんでも禁止してしまう」「被虐待歴がある」であった⁶⁾。

IV 考 察

1. 20年前の子育て状況比較

調査全体を通し 20 年前と育児状況を比較すると、大部分の親は子どもの誕生を肯定しており、健全なかかわりを示していた。不安要因として仮定した「夫の協力」については、今回の調査では、むしろ協力的になっていることがわかった。また実家や夫の支援が増加しており、友人などと利用できる環境整備を求める者が多数を占めた。実家や夫の率が高い点は支援の幅がせばまり、また核家族の進行を意味し、実家との距離や夫の仕事や夫との関係の変化が直接生活に影響してくることも考えられる。

20 年前に結果づけられたとおり、「育児のやり方がわからない」「子どもの世話をしたことがない」層はさらに増加し、それが子どもへの関わりを「いらいら」「大変だ」ととらえることにもつながっている。そのため、「育児の手伝いがある」とした者でも、いらいらする場合も多かった。いらいら感がとても強く、子育てが大変だということの回答の裏には、親の自立と関係

するのかということも考えられたが、回答状況からはその数字は非常に低く、むしろ子どもへの関心が高くなった。子どもへの一体感が親子関係をつらいものにさせていることが予測される。

「近所に話す人がいない」を育児不安要因にあげていたが、いても人付き合いが苦手だという意識をもつ者もいること、またあえて付き合わないという者や育児への評価が気になるなどが増加しており、対人関係の弱さの進行が明らかになった。

2. 虐待傾向の親

虐待傾向を示す行為にでる親の要因を分析した結果、育児支援のない人や、親が被虐待歴のあるために、同じ経過を辿って子どもへ暴力を向けやすいことが示された⁷⁾。また、子どもの人数についても大きな影響を与えており、子どもが増えるとたちまち暮らしづらいつらいつらいつらと考える家族力の弱さが示唆された。また、親子のかかわりにおいても孤立的な親ほど、家の中での緊張関係の中で、子どもにテレビをみせる、子どもに禁止する項目が多く、子どもを受け入れられない状況にあることがわかった。

虐待傾向が高い人の特徴として、従来のリスク要因である子ども時代の被虐待傾向、夫との関係、子どもの人数、経済苦などが生活をしくくさせているが、さらに子どもをどのように扱えばよいのかわからないという要因も加わり、より禁止をしたり、一貫性のない関わりをしていることが明示された。これらは子どもの発達に影響を及ぼす要因であり、大阪レポート以上に深刻になりつつあるといえよう。

3. 求められる子育て環境・子育て支援

一歳半児の子育て期は、子どもの発達面の成長に振り回されやすい時期である。言葉、運動機能や認知力が高まって、いわゆるいたずらの時期、さらに、言葉が遅いとか早いとか、いわゆる個別の発達状況の差が現れはじめ、親が気になる時期でもある。歩行に伴う子どもの行動半径の拡がりに応じて、親が適切に動けるといふ能力の差も

出始めるころでもある。さらに上の子や妊娠中ともなれば、親の負担は大きい。

「虐待傾向のある親」には、保育をはじめ、より具体的なサービスや相談提供が必要であることがわかった。さらに「孤立的な親達」は、むしろ引きこもりがちで外に援助は求めず、育児情報のみを必要とする傾向にあることが明らかになった。

子どもの発達を阻害することにもなるため、今後は地域の専門機関がそういった親子への予防策を検討する必要があるだろう。虐待の世代間連鎖を断ち切るための親へのケアの必要性からも、まだ虐待は発生していないものの、予防的な観点からの相談事業を展開していくことの必要性が見いだされた。夫を含めた家族相談なども必要になるかもしれないことが示唆された。

今後は、サービスの充実と、さらにどういった効果が期待されるのかという具体的な研究が必要となろう⁸⁾。ネグレクトの傾向の強い親に影響した項目や必要なサービスは、回答者が少ないために今後把握することが課題である。

本稿は、児童環境づくり等総合研究事業の中の児童相談所における児童虐待相談処理件数の増加要因に関する調査研究結果を分析したものである。

文 献

- 1) 母子愛育会.21世紀の母子保健を考える, 2000.3
- 2) 服部祥子・原田正文.乳幼児の心身発達と環境-大阪レポートと精神医学的視点,名古屋大学出版会,1992
- 3) 子どもの虐待防止センター.首都圏一般人口における児童虐待の調査報告書,1999,2000
- 4) 川井尚・他.育児不安に関する臨床的研究Ⅴ,日本子ども家庭総合研紀要,第34集,日本子ども家庭総合研究所,1998
- 5) 加藤曜子.児童虐待と育児不安の関係ー在宅虐待予防サービスがめざすもの,大阪成蹊女子短大研究紀要 35巻,pp.1-9,1998
- 6) 児童虐待防止協会.児童虐待ーグループよるケア・ワークの実践ー,2001.

7) 鶴飼奈津子. 児童虐待の世代間伝達に関する一考察, 心理臨床研, 18 (4) ;2000: pp.402-411.

8) E.Whipple: Reaching families with preschoolers at risk of physical child abuse: What works? Families in Society, April-March 1999: pp148-160.

表1 属性について(%)

		2000年	大阪レポート (1981年)
子どもの数	一人	49.2	
	二人	39.5	
	三人	12.3	
子どもの順位	第一子	53.5	
	第二子	36.5	
	第三子	9.8	
母親の年齢構成	10代	0.3	0.9
	20-24	4.9	21.0
	25-29	31.8	54.0
	30-34	43.6	21.0
	35-39	15.9	2.8
	40以上	2.3	0.5
住居状況	一軒屋	41.2	49.1
	集合住宅	55.9	49.2
	その他	2.5	0.0
	無回答	0.4	1.7
就業	している	21.3	26.9
	していない	78.7	72.8
家族構成	親子	87.4	72.2
	二世代	10.0	27.8
	その他同居	2.0	0.0
	無回答	0.6	0.0
家庭の状況	夫と同居	97.1	
	夫と別居	1.0	
	夫と離婚	1.3	
	未婚	0.1	
	死別	0.3	
	その他	0.1	
経済状況	暮らせる	48.8	
	何とか暮らせる	38.5	
	苦しい	12.4	
	無回答	0.3	

表2 大阪レポート結果比較 2000年 n=691 1981年=1469 (%)

		2000年	1981年
年少時、子どもの世話	よくあった	11.9	20.8
	少しあった	23.7	37
	なかった	64.4	39.3
	無回答	0	2.8
子どもといると楽しいですか	はい	86.7	88.3
	どちらとも	11.4	11.3
	無回答	1.9	0.1
手伝ってくれる人はいますか	はい	89.0	63.9
	いいえ	11.0	32.4
	無回答	0	3.7
近隣に話す人はいますか	数名いる	59.5	50.6
	1～2名	27.5	38.6
	いない	13.0	10.5
他のお母さんの中に入るのは	得意	20.3	なし
	どちらでも	57.0	
	苦手	22.6	
	無回答	0.1	
育児を批判されたり ほめられるのは	気にならない	20.8	なし
	どちらともいえず	51.1	
	気になる	28.1	
お父さんと遊びますか	はい	64.3	52.4
	まあまあ	25.2	41.0
	あまり遊ばない	7.8	5.7
	無回答	2.7	0.9
夫の協力はありますか	ある	72.5	37.7
	あまりない	23.4	53.1
	ない	2.3	7.6
	無回答	1.7	1.6
いらいらすることが多いですか	はい	30.1	10.8
	どちらとも	43.8	41.8
	いいえ	25.8	46.8
	無回答	0.3	0.6
子どもの性格を受け入れていますか	受け入れている	76.6	1.0
	どちらとも	22.9	1.6
	受け入れられない	0	1.4
	無回答	0.5	0
子どもにテレビをみせますか	よくある	21.7	54.2
	まあまあ	46.7	68.4
	あまりない	31.3	43.7
	無回答	0.3	2.1
子どもに話しかけますか	よくある	90.9	83.3
	ときどき	8.0	15.9
	たまに	0.3	0.3
	無回答	0.9	0.5
ある時は見逃しある時叱るか	はい	10.4	0
	ときどき	62.8	46.4
	いいえ	26.2	51.6
	無回答	0.6	0
子どもにあれをしてはいけない、 よく禁止しますか	よくする	25.5	1.9
	時にする	72.6	51.1
	しない	1.6	1.1
母の関心	この子	5.7	68.2
	他子	2.3	17.3
	自分のこと	4.2	12.9

表2-1 「話しをする人がいない」と「他の人としゃべるのが苦手」の関係(%)

	数人いる	1～2人	いない	計
得意	120 (85.7)	16 (11.4)	4 (2.9)	140 (100.0)
どちらとも	253 (64.2)	104 (26.4)	37 (9.4)	394 (100.0)
苦手	38 (24.4)	69 (44.2)	49 (31.4)	156 (100.0)

表2-2 「話しをする人」と「他人からの育児の評価が気になるかどうか」の関係

	数人いる	1～2人	いない	計
気にならない	97 (68.1)	27 (18.8)	19 (13.2)	144 (100.0)
どちらともない	215 (60.9)	98 (27.8)	40 (11.3)	353 (100.0)
気になる	98 (50.5)	65 (33.5)	31 (16.0)	194 (100.0)

表2-3 「他の母の中に入っていく」と「他人からの育児の評価が気になるかどうか」

	得意	どちらでも	苦手	計
気にならない	49 (32.6)	79 (54.9)	18 (12.5)	144 (100.0)
どちらともない	67 (19.0)	218 (61.8)	68 (19.3)	353 (100.0)
気になる	26 (13.5)	98 (50.3)	70 (36.3)	194 (100.0)

表2-4 「いらいら」と「他のお母さんの中に入っていく」の関係

	いいえ	どちら	はい	計
得意	44 (31.4)	60 (42.9)	36 (25.7)	140 (100.0)
どちらとも	105 (26.7)	179 (45.5)	109 (27.7)	393 (100.0)
苦手	29 (18.7)	64 (41.3)	62 (41.0)	155 (100.0)

表2-5 「子どもの遊ばせ方」と「他のお母さんの中に入っていくこと」の関係

	天気の良い日外で	少し外で	晴れていても屋内	計
得意	99 (70.7)	36 (25.7)	5 (3.6)	178 (100.0)
どちらでもない	244 (62.1)	138 (35.1)	11 (2.8)	301 (100.0)
苦手	67 (42.9)	79 (50.6)	10 (6.4)	156 (100.0)

表2-6 「子どもにビデオやテレビをみせる」と「子どもの遊ばせ方」との関係

	テレビをみせる	まあまあ	あまりない	計
天気良い日外で遊ぶ	71 (17.3)	191 (46.6)	148 (36.1)	410 (100.0)
少し外で遊ばせる	67 (26.6)	122 (48.4)	63 (25.0)	252 (100.0)
天気でも部屋で遊ばせる	12 (46.2)	9 (34.6)	5 (19.2)	26 (100.0)

表2-7 「テレビ・ビデオをみせる」と「イライラすることが多い」の関係

	テレビをみせる	まあまあ	あまりない	計
いらいら いいえ	37 (15.2)	74 (41.6)	77 (43.3)	178 (100.0)
どちらとも	64 (21.3)	149 (49.5)	88 (29.2)	301 (100.0)
はい	59 (28.4)	98 (47.1)	51 (24.5)	208 (100.0)

表2-8 「子どもの遊ばせ方」と、「よく禁止する」の関係

	よく禁止する	ときにする	しない	計
天気良い日外で遊ぶ	84 (20.5)	320 (78.2)	5 (1.2)	409 (100.0)
少し外で遊ばせる	80 (31.6)	167 (66.0)	6 (2.4)	253 (100.0)
天気でも部屋で遊ばせる	12 (46.2)	14 (53.8)	0 (0.0)	26 (100.0)

表2-9 「よく禁止する」と「いらいら」の関係

	いらいらなし	時々する	いらいする	計
よく禁止する	13 (10.3)	61 (2.1)	95 (54.6)	174 (100.0)
ときにする	156 (31.1)	237 (47.2)	109 (21.7)	502 (100.0)
しない	4 (36.4)	5 (45.5)	2 (18.2)	11 (100.0)

表4 主成分分析 バリマックス回転

	成分			
	虐待タイプ A	虐待タイプ B	虐待タイプ C	虐待タイプ D
手を叩く	.768	-2.468E-02	-1.416E-02	.182
大声で叱ってしまう	.660	.240	1.775E-02	-4.242E-02
尻を叩く	.657	.159	-3.697E-02	.197
頭を叩く	.518	.428	.106	2.579E-02
泣いても放っておく	.516	-1450E-04	.246	-.337
顔を叩く	.466	.462	.166	2.119E-02
ものを投げつける	6.340E-02	.741	7.499E-02	-2.1343E-02
ものを使って叩く	7.850E-02	.711	-.119	.178
子どもが傷つくことを言う	.195	.580	.292	-.222
つねる	.136	.414	-.206	.234
閉じこめたり追い出す	.183	.380	.228	2.844E-02
自動車に子だけ残す	6.962E-02	-4.498E-02	.778	3.691E-02
子どもを置いたままでかめる	-9.017E-03	.142	.679	.148
入浴・下着を替えさせない	.138	1.762E-02	4.054E-02	.687
食事を与えない	-5557E-02	8.473E-02	.221	.640
寒くても裸で外にだす	-5557E-02	4.981E-02	-7.462E-02	.147
固有値	3.508	1.299	1.273	1.231
寄与率	14.607	13.863	8.893	7.822

表5	標準偏差	平均	得点幅
虐待タイプ A 得点	2.28	4.6	(0 ~ 12)
虐待タイプ B 得点	1.34	1.0	(0 ~ 6)
無自覚タイプ	.62	.3	(0 ~ 2)
ネグレクト	.35	.1	(0 ~ 1)

表6 従属変数はそれぞれの虐待タイプの合計値とした重回帰分析

独立変数	虐待タイプ A	虐待タイプ B
経済状況	.105 *	
子どもの数	.130 **	.217 ***
母親の年齢	-.096 *	
いらいらする	.233 ***	.186 ***
一定しないしつけ		.078 *
よく禁止する	-.182 ***	-.112 **
育児の手伝い	-.119 *	
親から虐待を受けた	.151 **	.152 ***
父親が遊ばない		.110.
子どものかわりへの迷い		-.080 *
F	14.174***	20.825***
R ²	.295	.242

有意確率 (*p<.05,**p<.01,***p<.001)